# 第１原発近郊、一時帰宅者の救護

国立病院機構西新潟中央病院
内　山　政　二

ニュースにもならず、危険な割にはあまり注目されていない医療支援活動を報告する。福島第一原発近郊において、国立病院機構が一時帰宅者の救護活動を展開している。私が出向いた村は、一部が20キロ圏内の警戒区域に含まれ、役場や学校も含めて全村避難が続いていた（当時）。一時帰宅者は福島県内外の避難先から救護所のある中継基地にまず集合し、そこから自宅のある集落ごとにバスで往復した。自宅滞在は２時間以内に制限されていた（図１）。

災害時の医療は予定通り行かないことが多い。今回も現地に配置されているはずの医薬品が何もなかったため、あり合わせの物で対応した。痛み止めには風邪薬、疲労による気分不快や嘔気にはトラベルミン、また打撲捻挫には、暑さ対策用に置いてあった冷却剤をシップ代わりに使用した。あるものでやる、それが災害時の医療である。

当日の最高気温は22℃と涼しかったが、それでも防護服の帰宅者は暑かったとのことであった。救護患者は帰宅者64名中８名、主な内容は車酔い、軽度脱水、頭痛であった。いずれも軽症であり、病院搬送者はいなかった。さらに現場には自衛隊の除染部隊も待機していたが、除染が必要となった帰宅者はいなかった（図２）。

実測放射線量

１）救護所室内：新潟市と同レベル＝0.1 μ SV/h 以下

２）救護所屋外：新潟市の５～10倍

３）同所の側溝：同50倍以上＝10時間いると胸部 Xp １枚分の線量

支援活動の志願者を募ったところ、複数の若手医師が手を挙げた。その志はとてもうれしかったが、“役得”として私が出向いた。同行した男性看護師と事務職員は皆とてもよく動いてくれた。彼らの中には、家族に心配をかけまいと、出張とのみ伝え、行き先を告げずに来た人がいたことを後で知った。新潟県からこのような医療支援に出向いたチームがあることも知っていただきたい。

図１　第一原発近郊で一時帰宅者の救護

図２　自衛隊除染部隊も待機